太陽のオオカミと月のキツ

かつやりき

太陽のオオカミと月のキツネ

今より
太陽はずっと温かく光り輝き、
月は優しい光で地球を照らしていた頃の事。
たくさんの動物がくらす豊かな山がありました。
この山には「山守り」いう山の動物たちを守るオオカミとキツネの兄弟がいます。
兄は赤く大きな目をしたオオカミ。
山の動物たちからは「山の太陽」と言われとても尊敬されています。
オオカミはとても強くてかしこく、
たくさんの知恵を山の動物たちに教え、山を豊かにする光りかがやく英雄でした。
しかし、人間からはまっ黒なその姿をとてもこわがられていました。
妹は青い目をしたキツネ。
山の動物たちからは「山のお月さま」と言われとても愛されています。
キツネはとても心がやさしく、
こどもの動物や、お年よりの動物、体の弱い動物たちに川魚や薬草をあたえ、元気づける愛にあふれた英雄です。
　しかし人間から見ると、まっ白なキツネはぶきみな動物でした。
オオカミとキツネは森の平和のために力を合わせ生きています。
　そんなある日の夕暮れ時のことです。
　キツネがいつものようにオオカミの大好きな食べものであるネズミをつかまえようとしていた時のことでした。
　「ガシャン！」
ものすごい音が山にひびきわたり、
キツネは人間のしかけたワナにかかってしまったのでした。
　キツネはおどろき、なんとかワナから出ようとあばれ回りました。
　しかしがんじょうな竹で出来たそのワナはキツネがどんなにあばれようとまったくビクともしませんでした。
　『山守りの自分がワナにかかってしまうなんて…』
キツネはオオカミ兄さんの事を思うとポロポロ涙が止まりませんでした。
　キツネの涙がそうさせたかのように、
夕日はしずみ、あたりはくらくなりはじめ、空からは大つぶの雨がふり出しました。
キツネは悲しみと寒さで胸がはりさけそうな思いでいっぱいです。
　あたりはトンとくらくなり、しばらくたったころでしょうか。
キツネの目の前に、
どくだみの葉をカサにした桃色の目のネズミがヒョコリあらわれ、キツネにタンポポの花たばをワナのすきまからわたしました。

「おまえ何も食べてないだろ？タンポポはお日さまの味がするから食べろ。」
　ねずみの言葉にびっくりしましたが、キツネはとてもお腹がすいていたのでタンポポをムシャムシャと食べました。
「オレ様がワナからおまえを出してやる。
そのかわり、これからはオレ様を食べるな。
オレ様を食べていいのはオオカミだけだ。」
とネズミが言いました。
「どうして私をたすけるの？それにネズミさんを食べていけないってどういう事？」
キツネはわけがわからずネズミに言うと、
「理由はあとから話す。とにかく今はこのワナをこわすことが先だ。」
　と、ネズミは持っていたどくだみの葉のカサをキツネの頭の上にチョコンと乗せて、
ワナをガリガリとかじり始めました。
　ザーザーとふり続ける雨の中、ワナをこわすネズミ。
そんなネズミが雨でぬれないよう、キツネはワナから外に手を出し、ネズミのカサになりました。
どれほどの時間がたったのでしょう。
あたりはもうすでにまっくらやみでした。
けれどもネズミは休むことなくワナをかじり続けました。
キツネも雨に打たれてびしょ濡れになりながらネズミを雨から守りつづけました。
たくさんの竹を編んで作られたがんじょうなワナは、しだいに竹が一本・二本めくれ出してきました。
　そして大つぶの雨がやみ、空の色が黒色からむらさき色になり始めたころ、
ワナはミシミシとくずれ出しとうとうバキリッと音を立てこわれたのです。
　ワナから外に出たキツネはネズミに何か食べてもらおうと、近くのしげみで木の実を取るとネズミにさし出しました。
するとネズミは、
「オレ様は森にすんでいるが、人間の食べ物しか食べない。人間の事をよく知るためだ。
そんなオレ様を山守りのオオカミとキツネに食べてもらう事で人間の事をつたえていた。
この事は山の太陽のオオカミとオレ様との昔からの約束だ。」とネズミは言いました。
「そうだったの。私は何も知らずネズミさんを食べていた。けれど、どうしてこれから私はネズミさんを食べてはいけないの？」
とキツネが言うと、ネズミは顔を下に向け、しぼり出すような声で話しはじめました。
　「…オオカミはこの森にもういない。
キツネがワナにつかまったころ、オオカミもワナにつかまってしまった。
オレ様はオオカミを助けようとした。
だけどすぐに人間たちが来てオオカミをつれさっていってしまった。
その時オオカミがオレ様に、

『ボクは必ず生き続ける。また会おう。キツネの事をよろしくたのむ』とさけんだ。
オオカミの言葉をまもるためにもオレ様を食べてもらっては困るんだ。」と言いました。
キツネはヘナヘナと力が抜け、涙をボロボロと流し、「オーンオーン」とオオカミのことを思い空に泣き続けていた時でした。
「ワオーン！ワオーン！」
キツネの泣き声を消し去るかのようにオオカミの遠吠えが人間の住む町のほうから山中にひびきわたったのです。
オオカミの遠吠えと共に雨あがりの空に朝日がのぼり、
それはそれは大きな虹が空いちめんに輝きだしたのでした。
「オオカミ兄さんだ！オオカミ兄さんの声だ！」とキツネはうれしくてしかたがありませんでした。
　「オオカミは山の太陽だ。
どこにいてもぜったいに生き続ける。
いつか必ず会えるさ。それまでオレ様がキツネを守ってやる。だからオレ様とオオカミを探しに行こう。」
　とネズミがキツネの手をギュっとにぎりしめました。
　「うん。必ずオオカミ兄さんに会う。」と、
キツネもネズミの小さな手をにぎり返し、
2匹はオオカミの遠吠えがした方へ旅立って行きました。